

## 物理学の因果的閉包性と心的因果 — トロープによる解決策を中心として —

藤嶋 裕樹

心的なものが物理的な世界の中でどのようにして因果的に効力を持ちうるのか、という心的因果の問題は、心の哲学の主題の一つである。本研究では、分析哲学の手法を用い、この心的因果の問題に関連する歴史的研究、先行研究について考察し、なぜ心的因果の問題が発生するのか、また、どのようにすればその心的因果の問題を解決し、心的なものの因果的効力を認めることができるのか、ということについて考察を行った。

わたしたちは普段の経験から、心的なものが因果的に効力を持っているといたいくなる。喉が渴いたと感じ、冷蔵庫へ水を取りに行く、といった場合、喉が渴いた、という感じが冷蔵庫へ水を取りに行くという結果を引き起こした、といたいくなるのである。その一方でわたしたちは、物理的なものが原因となり物理的な結果を引き起こす、という例についても容易に理解することができる。わたしたちは、物理学の法則が正しいということについて経験的に知っている。この物理学について、物理学こそが認識論的にも存在論的にも全ストーリーであると主張する立場は、「物理主義」と呼ばれている。

心的なものの因果的効力と物理主義の主張、どちらも単独では成り立っているように見える主張であるが、同時に成立させることは難しい。すなわち、物理的な出来事はみな、その出来事を引き起こすのに十分な物理的原因を持つ（因果的閉包性）というのならば、どうして心的なものが因果的に効力を持つことができるのだろうか、という問題が生じる。

この心的因果の問題を解決しようと試みた歴史的研究、及び近代の先行研究について、ティム・クレイン、ジョン・サールらの先行研究に沿いつつ、考察を行った結果、物理学の因果的閉包性を同時に認める場合、心的なもの<sup>と</sup>物理的なもの<sup>と</sup>を明確に区別する実体二元論及び性質二元論の諸説は、心的なもの<sup>の</sup>それ<sup>として</sup>の因果的効力を認めることは不可能であるということが明らかになった。また、現代の心的因果問題に関する議論で特に有力説とされているデイヴィッドソンの非法則的一元論と、ロブのトロープ説についても考察を行った。その中で、デイヴィッドソンの非法則的一元論は、その成立のためにスーパーヴィーニエンスという考え方が必要となるが、そのスーパーヴィーニエンスという考え方は過剰決定と因果的排除の問題から逃れられていないこと、また、ロブの主張するトロープ説が、デイヴィッドソンの非法則的一元論の難点を克服できることを示し、ロブのトロープ説は、心的なものが因果的に関連できているという点で、心的因果の問題に対しての有力な説となりうることを明らかにした。

ロブのトロープ説はまだいくつかの問題を抱えており、このトロープ説が心的因果の問題や、その他の心身問題の全てを解決しているわけではないが、今後の議論にも影響を与える説の一つでありつづけると考えられる。

(指導教員 横山幹子)